

# Local knowledge の生まれる場所

## ～当事者研究がもたらしたもの～

上野千鶴子

(東京大学名誉教授・NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク理事長)

### 1. 学問にもベンチャーがある

タイトルにある Local knowledge というのは皆さま方にとって親しみのある概念ではないかもしれませんが。これは後ほどご説明します。

平成 31 年度東京大学入学式の祝辞で私はバズりました。このスピーチの中の文章から色々な箇所が引用されましたが、その中で私はこういう発言をしています。「学問にもベンチャーがあります」。マーケットの中に成長産業部門があるように衰退産業部門もあり、それが入れ替わっていきます。学問の中にも同じようなことがあります。このところ例えば東京大学文学部の専攻でもドイツ語ドイツ文学、サンスクリット文学、中国思想等が定員割れを起しています。本当はこういう専攻は文化財のようなものですから、たとえ定員割れを起してもきちんと保存すべきだと思いますが、その中で社会学というのは比較的新興の学問でした。私はその社会学に進学したのですが、そこに自分の居場所がないと感じ、社会学はつまらない学問だと感じていました。大学院には進学したものの自分が学問向きとは到底思えず、やめようと何度思ったか分かりません。けれども、それならいっそのこと学問のほうを自分向きにしてやろうと不遜なことを思った私のような女たちが同時代にたくさんいたということが幸運でした。

### 2. それはウーマン・リブから始まった / 女性学の定義 (井上輝子)

私の学生時代はウーマン・リブの時代です。外国へ行くと「男性よりも 3 歩下がって歩く日本女性がウーマン・リブを本当に行ったのか」と言われることがあるのですが、『資料日本ウーマンリブ史』全 3 巻という証拠物件がありますとお話しています。その中から女性学が生まれました。いわばリブが学問の世界に殴り込みをかけたと言ってもよいかもしれません。

アメリカ発の女性学のもともとの定義は、Interdisciplinary Studies on Women というものに過ぎません。女性を対象とする学際研究のことですから、これを女性学と訳すのは正確に言うと誤訳です。しかし、井上輝子さんはあえて創造的誤訳をなさいました。その点では他の interdisciplinary studies, 例えば老年研究だと on ageing, 地域研究の area studies も interdisciplinary studies ですから、特定の対象に対して学際的にアプローチするという点では地域研究ともあまり変わりません。

ここに井上さんは画期的な定義を持ち込みました。「女の・女による・女のための学問研究」です。分かる人には直ちにこれがリンカーンの民主主義のパロディーであることがお分かりいただけるかと思います。「人民の人民による人民のための政治」です。この定義は当時物議を醸しました。女を対象にするという所までは問題ありません。女性を論じるのが大好きな男性たちはたくさんいます。しかし、その次の「女による」に対しては、「女が女を研究すると主観的だから、それは学問ではない」と言われました。男性研究者から「自分たちは参入できないのか」と批判を受けました。大学にある従来の学問は全て男性が「男の子いかに生きるべきか」について考えてきた知の集積でしたから、そのことに価値がないとは申しませんが、その中に私はいないと私が感じたのも無理はなかったわけです。男性がありとあらゆる知の領域を占有してきたことに対し、女性が研究の主体となるということが画期的でした。私にとっては女性学との出会いは、そうなのか、自分自身を研究対象にしてよいのかという目から鱗のような経験でした。もし学問というものが客観的・中立的なものでなければならないとするならば、女性を研究するには女性以外の者が行わなければならないこととなります。そうであるとしたら女性以外の者というと男性しかいませんので、男性が女性を研究すると客観的ということになりますが、実際には過去にあるさまざまな男性による女性研究は男性の

妄想の集合であるということもよく分かります。その点では女性が研究の客体でもあり主体でもあるということが非常に重要でした。

もう1つ「女のための」という定義も物議を醸しました。「学問とは中立的・客観的でなければならない。女性という特定の集团的利益のために奉仕する学問とは偏ったイデオロギーであり、学問とは呼べない」と散々たかれました。今から思えばこの定義は、私たちに女性が女性自身を女性のために研究するという画期的な地平を開いてくれました。女性は、人数は多くても社会的マイノリティでしたから、マイノリティによる当事者研究のはしりだったと思います。当事者研究という言葉が後で登場したとき、これなら私は知っている、私たちがやったことだと感じました。

### 3. 新しい研究課題

そこで出てきた新しい研究課題があります。例えばナプキンやタンポンがなかった時代の女性は一体どのように月経の始末をしていたのだろうかということは資料に残らず、文献にも残らず、かつ女性もそれを語らず口にもしないという理由で伝わってきませんでした。研究をしようと思ったら先行研究が一切ありません。自ら現場に赴いて調べるほかないので、それを始めた人がその分野のパイオニアになり、かつ第一人者になるということがいろいろな局面で起きました。

女性学の研究対象は女性の経験のさまざまな分野に広がっていき、その結果、男性がこれまで関心を払わず学問の上で価値がないと思われてきたことの全てが研究課題になっていきました。今日大学の卒業論文や学位論文でBL(Boys Loveの略称)の研究や出産の研究、さまざまなセクシュアリティの研究で学位が取れるようになったことも、このような努力によって研究分野を開拓してきた効果です。

そのようにして徐々に学問の世界の中で市民権を得ていったのが女性学です。今日女性学を専攻することにより、学位を取ることができます。それから学会もあります。学術ジャーナルもあります。それから研究費とポストもわずかながら得られるようになりました。

### 4. 男性学はあるか？

そのようにして学問の中で市民権を得ていったわけですが、そこで男は何をすればよいのか、男性学はあるのかという問いが立てられました。答えはイエスです。もちろんあります。これは私が作った定義ですが、男性学とは「女性学を通過した後の男性の自己省察のための学問研究」です。別の言い方をすれば、「女という鏡に映ったボクちゃんの顔をきちんと見つめてほしい」ということです。

男らしさについては謎がたくさんあります。例えばAV産業は「抜くためのおかず」と言われているそうですが、このようなことばを口にして講演してよくなったことも大変ありがたいことです。低予算でできた安直なワンパターンのものが多いですが、それでも「毎回抜けてしまうボクって誰？」というのは深い謎です。私にも分かりません。そういう謎は男性自身に解いていただくしかありません。例えば「AV視聴における男性の性的主体化に関する研究」などという論文も書かれるようになりました。男性は自分が何者であるかについて十分に知っているとは思えません。女性も同じです。かつて Simone de Beauvoir という人が「女は女に生まれるのではない、女になるのだ」と言ったのと同じように、男性にも同じことが言えるのではないのでしょうか。

### 5. ジェンダー研究の成立

その男性学・女性学を両方合わせて両性学という言い方もあります。ジェンダー研究という分野は、最初、男性が関心を払わず見えない領域に置いてきた私領域における女性、つまり女の領域と言われていたところにいる女性の経験や関心を研究対象にしてきたわけですが、女性はもちろん私領域だけでなく公領域にもいます。政治、経済、さまざまな社会的領域にいます。女性学はこの2つを対象にしてきたわけですが、男性学は女性に対して男性として主体形成・同一化をするような私領域における男性性を扱ってきたと言えます。そうすると、最後に残るのはこの分野、すなわち公領域の男性、つまりジェンダーを不問にしてきた男性領域があります。従来この領域からほぼ女性は排除されてきました。経済、政治、学問もそうでした。私どもが学生の時代には大学の教員はほぼ男性ばかりでした。私が最初に教壇に立ったときに大学の男子学生からこう言われたものです。「大学まで来て女の先公に教わろうと思わ

なかった」と。そういう時代がありました。

今でこそ政治家の中にも女性が増えましたけれども、最後の男性性の聖域と言われる軍隊、別名「男らしさの学校」とも呼ばれる軍隊の中での女性も増えてきました。そうなるとジェンダー研究は、女性がいる所では女性の研究を、女性がいない所ではなぜそこに女性がいないかの研究を、あるいはそこで男性性・女性性がいかに構築されるかの研究を行うということになります。人間の社会の中でジェンダーが関与しない領域はほぼないと言ってかまいません。したがってジェンダー研究に扱えない領域は一切ありません。ですから、軍隊のジェンダー研究も国家のジェンダー研究ももちろんあり得るわけです。

そのような形で女性学・男性学からジェンダー研究が発展してきて、さらにその中からセクシュアリティ研究も生まれました。

## 6. 学問の中立性・客観性の神話

その背後で私たちが闘ってきたものは、学問の中立性・客観性の神話です。神話とは根拠のない信念集合の別名です。当事者が自分自身を研究すると偏向している、主観的だ、したがって学問ではないと言われました。しかし、本当に当事者が自分自身を研究すること、あるいはマイノリティの目を通じて男性のようなマジョリティ集団を研究することはゆがんでいたり偏っていたりするのでしょうか。現状を変えたいと思えば現状を正確に知ることは必須です。ここに希望的観測が入ってくると認知のゆがみが起きます。私はこのときにいつも思い出すエピソードがあります。鶴見俊輔さんが南方戦線の通信兵をしていたとき、彼には語学力がありましたので彼の任務は外国のラジオ放送を聞いてそれを翻訳して上官に伝えることだったそうです。なぜなら、大本営の発表だけを聞いていては、殲滅したはずの敵艦隊がある日ひょっこりと水平線のかなたから現れるかもしれないからです。正しい情報を得なければ、敵に勝つこともできません。

当事者研究では、自分がどういう立場で何を研究するかということが問われます。当事者とは誰かという問題を抱えた人々のことを言います。私は学生から非常にシンプルで直球な質問を受けてたじろぐことがあります。「先生、問題って何ですか」と聞かれたことがありました。そのときに我知らず反射的に自分でも予期しない答えを口に出してしまっていたことに驚いたことがあります。それはどのようなせりふだったかという、「問題とはあなたをつかんで離さないものことよ」と言うものです。当事者とは、その問題から逃れることができない人々のことをいいます。問題と人とを切り離して、問題から距離を置くことや相対化することは大事ですが、それは決して第三者の立場に立つということではありません。

学問とは何かというと、私が学生に伝えてきたのは次のようなことです。かけがえのない自分の経験を仲間と支え合い、他人に伝わる言葉で、きちんと根拠を示して論理性を与えて説得する、そして伝わる、伝える、知にしていく。そのようにして伝達可能な知の共有財を蓄積していくのが私たち研究者の役割です。ですから、学問はいつでも私から出発します。

## 7. 定義の政治＝フェミニズムの達成 Personal is political.

「Personal is political（個人的なことは政治的である）」という有名なフェミニズムの標語があります。私たちが達成してきたものは、定義の政治 politics of definition というものでした。達成した成果には幾つかのものがああります。性的いたずらやかからかいと呼ばれてきたものをセクシュアルハラスメントと再定義し、痴話げんかと呼ばれてきたものをドメスティックバイオレンスと再定義し、つきまといをストーカーと再定義することに成功してきました。セクハラが1989年に流行語大賞になったとき、どのようなことが言われたか私は記憶しています。セクハラは「職場の潤滑油、したがって油が切れるとぎすぎすする」とまで言われたものです。それから「痴漢はあって当たり前、受けたことのないおまえには魅力がない」とまで言われていました。東京メトロの駅で「痴漢は犯罪です」というポスターを見たときの感動を、私は今でも覚えています。女性学が行ってきたことは女性の経験の言語化、理論化、すなわち経験の再定義です。過去にさかのぼって、もやもやしたあのときのあれは一体何だったのだろうか。あれはセクハラというものだったのだと過去の経験の再定義もできるようになりました。

この背後にあるのは、「権力とは状況の定義権である」という Foucault の権力論です。知は権力です。ですから、

knowledge はパワーです。その中で状況の定義権が争われます。例えばセクハラを巡っては加害者と被害者の間に非常に大きな perception gap があることが分かっています。裁判では本当らしさが争われます。実際にあったセクハラ裁判の事例では、被告の言い分と原告の言い分を両方聞き比べ、裁判長が加害者である被告の言い分のほうを本当らしいと判断するという例もありました。つまり、そこでは本当らしさを判定する権力の行使が明らかなジェンダーバイアスを持っていたということです。そのときに本当らしさを保証するものは、誰が言うかです。権力者が言えばそれが本当らしさになります。誰が語る資格を持っているかということ、一介の市民よりも資格のある権威者が言ったほうが効果がある、というのが entitlement というものです。

## 8. セクハラの見え

セクハラの見えに関しては、見えなかったものを見る化するためにエビデンスを提示する必要がありました。80年代に「働くことと生きることを考える三多摩女性の会」というグループが「あなたはこういう経験がありますか」という調査を実施したところ、「あるある」とおびただしい事例が出てきました。被害者たちは沈黙していたけれどもそれが共通の経験だということが分かり、かつ日本初のセクハラ訴訟が起き、しだいに訴訟の勝訴率が上がり、賠償金も高くなり、「セクハラは高くつく」という常識が生まれるようになりました。今日 #MeToo のような運動が生まれているのも、こういう蓄積のおかげです。#MeToo の集まりでは若い男性が若い女性のそばに立ち、マイクを握って「これは僕らの問題です」と言いました。そのとおりです。これを女性問題と呼ぶのは間違いです。セクハラは男性問題です。

DV についても非常に面白いことがありました。90年代初めに「夫（恋人）からの暴力」調査研究委員会が「あなたはこういう経験がありますか」という調査をしますと膨大な回答が戻ってきました。その調査から得られた DV 経験率 59% という数値が国連の文書に載って世界中に出回りました。驚くべきことにケニアの男性より日本の男性のほうがもっと暴力的であるということになってしまったのですが、この調査はいわゆる科学的調査、ランダムサンプリングではなく、スノーボールサンプリングといって、それに答える意思のある人が応じるので、どうしても回答率は高くなります。これでは国辱ものだということで慌てて政府が調査を行いました。調査にはお金も手間もかかります。その結果得られたデータは、日本女性の DV 経験率はカナダよりやや多く、アメリカよりやや少ない 4 人に 1 人という国際標準であるということが分かったのですが、この背後に面白いエピソードがあります。「日本に DV 経験率の調査データはあるか」と国連から当時の統計の担当部局であった総理府に問合せがあり、担当者が「いや、国にはない。だが民間が調査を行っている」と言ってこの研究会を紹介したところ、そこが提供した数字が独り歩きをしました。調査をしたことで DV は初めて見える化したわけですが。

「経験の再定義」には、私自身も 1 つの貢献をしました。私の「家父長制と資本制」という本は今から 30 年以上前に書いた本です。ここで私が提示した概念が、「不払い労働」という概念です。それから約 30 年たって「逃げるは恥だが役に立つ」という人気のあるトレンドドラマが放映されました。これを見て 30 年前には受け入れられなかった考え方がこれだけ常識になったのかと驚愕（きょうがく）しました。このドラマの男性主人公は家事が不得意で、高学歴ワーキングプアのみくりさんという女性を家事労働者に雇っていました。あるときお金の詰まって給料が払えない可能性が出てきます。「良いことを考えた。結婚しよう。結婚したら僕はあすから君に給料を払わなくて済むようになる」と言ったことに対して「それは愛の搾取です」という答えをこの女性が言ったというドラマです。私がびっくりしたのは、このドラマのシナリオライターが戦後「主婦論争」の都留重人さんの論文を読んでいたのかと思ったからです。1959 年、都留重人さんという優れた経済学者がこのようなことを書いてきます。

「かりに私が独身であるとする。男一人では日常の家事が不便であるから女中をやとおうとする」。女中は今は差別用語ですけども、歴史用語ですからこのまま使います。家事ぐらい自分でしろよと思いますが、この時代には普通のことでした。このとき、彼が女中さんに支払っている給与が年間 12 万円くらいです。「ある年の元旦のこと、私はその女中と結婚したとする」。これもよくある話です。「相も変わらず彼女は同じように掃除をし洗濯をし食事をつくり私の世話を見てくれるだろうが、もはや私は（前年どおりの）給与を払わない。そうなると日本の国民所得（GDP）は私が女中と結婚した年から 12 万円（その分）だけ減ってしまうのだ。おかしいではないか」。素晴らしい目の付け所です。脚本家はこれを読んだことがあるのかと思ったのですが、読んだ形跡はありません。都留さんのこの考えは戦後「主婦論争」の中では、完全にスルーされてしまいました。

国勢調査は皆さんご存じでしょうか。5年に1回9月の最終週の1週間に「あなたは仕事をしましたか。した人はこちらへ行ってください。しなかった人はこちらへ行ってください」という選択肢を選ばせます。「少しも仕事をしなかった人」の中に家事が入っています。「家事は仕事ではないのか」ということで、1985年に初めて公的なメディア、『朝日新聞』の読者投書欄に50代会社員男性が「うちのかみさんも怒っています」という投稿を出しました。

それで『朝日新聞』がご丁寧に特集記事をつくりました。総理府統計局に問いあわせたところ、ご存じのとおり国勢調査は1920年から行われていますので、「比較のために調査項目を変えるわけにはいきません」という、木で鼻をくくったような答えが返ってきました。しかし、その過程で見えない労働、不払い労働を女性が行っているということが見える化してきたわけです。

## 9. 「不払い労働」論はふたつの敵と闘わなければならなかった

この不払い労働論は2つの敵と戦わなければなりません。まず主婦の方たちから猛反発を受けました。「私たちが行っていることは愛の行為であり、金銭に換算されるようなものではない」と彼女たちは言いました。それを応援する「あなた方は価値のあることをしています」という保守おじさんたちがいました。もう一方でマルクス経済学者たちはこう言いました。「家事が労働だというのはあなた方が経済学に無知だからだ。家事は労働ではない。もし労働であってもそれは価値を生まない不生産労働である。なぜならマルクスがそう言っているからだ」と言ったわけです。私たちはこう思いました。もし理論と経験が両方にあり、それが一致しない場合、理論が経験を説明しないとしたら理論のほうが間違っているのか経験のほうが間違っているのか。経験が間違っているとは決して言えません。間違っているのは理論に決まっています。私は日本では数少ないマルクス主義フェミニストですが、時々「上野さんはマルクス大好きお姉さんなのですね」と言われます。しかし、マルクス主義フェミニストとはマルクスに忠実なフェミニストのことでなく、マルクスに挑戦したフェミニストのことです。

この論争は、第2波フェミニズム以前の第2次主婦論争では、女性の側の敗北に終わりました。ちょうど異端審問で法廷を去っていく地動説の主導者であったガリレイが「それでも地球は回っている」と言ったように、女たちは「それでも私は疲れている。3食昼寝付きなどとてもない。朝から晩までコマネズミのように働いている。この私の経験は一体どうなるのか」というつぶやきを残して退場したのですが、そこに理論的な根拠とエビデンスを与えたのが不払い労働論でした。

## 10. 社会問題はクレイム・メーカーによって作られる

不払い労働論は2つのインプリケーションを持っています。第1は、家事も労働だ、しかも不当に支払われない不払い労働だということです。労働の定義はとても簡単です。労働を定義するには、第三者基準というものがあります。生存を維持する活動のうち第三者に移転可能なものをいいます。例えば食べる・排せつするという事は自分に時間がないからといって第三者に代わって行ってもらうことはできません。けれども、子育てや授乳は人に移転できます。もちろん家事も移転できます。それどころか最近では妊娠・出産まで第三者に移転できるようになりましたので、生殖労働というものも生まれてきました。フェミニズムによって、unpaid workが労働の中に含まれるようになったのは大きな変化でした。これを政府は公式の訳語で無償労働、無報酬労働、無収入労働等と訳していますが、元の英語はunpaidです。べたに訳せば「不払い」なので、私どもは断固として「不払い労働」という言葉を使います。なぜこの言葉を使うかというと、「無償労働」と言うよりも「不払い労働」と言うほうが不当感が高まるために怒りが湧くからです。概念にはそのような効果があります。

現場が生んだ知は面白いと思います。私は生協研究も長らく行ってきました。生協運動が生んだ地生えの概念は面白いです。生協活動は専業主婦が行うものだと思われていましたが、その中から「活動専業主婦」という概念が生まれました。これを広めたのは研究者の金井淑子さんでしたから「金井淑子の言う」という引用が散見されますが、もともとこれを生んだ人は芝実生子さんという生協組合員です。「活動専業主婦」とは、専業主婦は専業主婦だが、家事育児専業ではなく生協活動を専業にするために無業の主婦を積極的に選んだ主婦という意味です。うまいこと名付けたものです。それからアンペイドワークという言葉が生まれると、「半ペイドワーク」というbrilliantな概念が生まれました。これもエコノミストの竹信三恵子さんが拡散したために竹信さんの造語と思われているようですが、こ

れも前田陽子さんという生協の組合員が生んだ言葉です。生協組合員の主婦たちが外に出て働くようになって、一人前の賃金がかせげない、せいぜい半分程度だから「半ペイドワーク」なんだそうです。アンペイドワークはもともと学問の概念ですが、アンペイドワークと現場との間の往還があり、その中で新しい概念が生まれてきます。これが現場というものです。

私たちは今日においても次々と新しい概念が目の前で生まれるのを目撃しています。新しい概念は新しい現実を見える化します。裏返せば新しい現実が登場したときにそれを理解するために新しい概念が必要になると言ってもいいでしょう。最近生まれた言葉に、「ヤングケアラー」、「ダブルケア」等があります。「ヤングケアラー」とは家族の中に世話をしなければならぬ親や祖父母、きょうだいがいて、そのために非常に大きな負担を抱えている18歳未満の子どものことです。昔ならば家族で助け合う「親孝行な良い子」で済んだことが、本来あってはならないことだという価値観をここに含んでいます。「ダブルケア」もそうです。育児と介護が同時期に来ることの負担は通常よりも非常に重い負担です。「ワンオペ育児」が登場した時には感心しました。ワンオペレーションという1人職場の不当性を表す概念を育児に持ち込んだもので、女が1人で育児をするのは不当だ、あってはならないことだという価値判断を含む概念です。「ケア・レス社会」もあります。ケアという人間の生存を維持するためにはなくてはならない活動を無視する社会のことです。LGBTQXのような性的少数者を呼ぶ用語も、これまで存在しなかったものでこれだけ並べなければならなくなりました。このようにしてようやく見えないものが見える化する動きが出てきました。

問題とは何か？社会学には「社会問題の社会学」というものがあります。その背景にあるものの考え方は、現実人間の活動によって構築されるということです。問題はそこに転がっているわけではありません。それが「問題だ」とクレイムメイキングする者によって、問題は作られます。クレイムメイカーが1人である場合にはスルーされるかもしれませんが、支持者を得ることができれば運動になっていきます。そのようにして「問題」が社会的に見える化していきます。女性学が行ってきたこともそれでした。もちろん女性学の背後にはフェミニズムという運動がありました。

## 11. Local Knowledge とは何か？

今までお話してきたことは女性学の経験でしたが、ようやくここで Local Knowledge にたどりつきます。Local Knowledge の反対語は Universal Knowledge です。普遍的な学知がこれに当たります。local というのは局所的という意味で、普遍性も妥当性もないと考えられがちな knowledge ですが、同じような知を Clinical Knowledge と呼ぶ人もいます。臨床というのは出来事が起こる現場で生成する知です。「事件は現場で起きる」と言うように、ラボで起きるわけではありません。こういう考え方を早くから持っていたのは人類学者たちでした。人類学の世界には Native category という概念があります。この native は、最初の頃はほとんどない訳をされていました。「土人」と言われていたのですが、「土着の」とも訳されます。つまり当事者たちが現場で使っているカテゴリーのことです。それに対して学知はそれを解釈します。それを analytical category といいます。カテゴリーの普遍性を人類学は強調してきたために比較文化が可能だと思われてきましたが、現地に入ってみると私たちの常識はいくらでも覆われます。虹は7色かと思っていたら10色だと言う人たちもいます。現実を分節する仕方は民族と文化によって多様です。認識の分節は主として言語によって行われるために、Sapir & Whorf 仮説等も出てきました。

## 12. 「普遍」とは何か？

普遍的な知と言われているものは一体何か。「普遍」と言われているものも、「おまえはたかだか西洋の知にすぎない」ということです。サイエンスと呼ばれているものは西洋が生んだ学知です。私たちはそれを学び、模倣し、導入してきたわけですが、その西洋中心性を見事に言い表した人が「オリエンタリズム」を著した Edward Said でした。ヨーロッパにはオリエン研究が山のように積み上がっていますが、「そのヨーロッパのオリエン研究を通じてわれわれが知ることができるのはオリエントとは何かではない。オリエントとは何かについて西洋が生み出した妄想の集積だ」と Said ははっきり言いました。ですから、オリエンタリズム研究とはその実、西洋研究であり、オリエン研究ではありません。全く同じことを女性学・ジェンダー研究も行ってきました。Joan Scott という『ジェンダーと歴史学』という本を書いた女性の歴史家が見事なせりふを言いました。「女性史やジェンダー史とは偏った歴史である」つま

り partial (部分的) である」という批判を Scott らは受けました。Scott はそれを「Yes, but…」と切り返しました。「自分たちの知が partial であることを否定はしない。だが、おまえたちもたかだか男性知に過ぎないではないか。つまり、あらゆる知識は partial である」と。partial というのは「部分的」でもあり、「党派的」でもあるという意味です。Scott は男性知の普遍の地位を揺るがしたわけです。ジェンダー研究はこのようなことを行ってきました。

専門家とは普遍性を担い、物事の真理性を判定する権力 (entitlement) を持った人々の集団であると思われてきたわけですが、専門性とは一体どこで生まれるのでしょうか。それは資格や学問や教育の中から生まれるのかというと、そうではなく経験の中で生まれます。例えば一定の活動を長い間続けてきた市民なら、例えば町づくりや環境運動等を行ってきた人たちの専門性のほうがむしろ専門家の専門性を上回る、あるいはそれと対等だという考え方も生まれてきました。これが「市民的専門性」という概念です。

それから当事者の経験知が非常に高く評価されるようになりました。学知が決して生むことのできない経験知です。そこで生まれてきたのが「私が私の専門家」という標語です。ここから当事者研究というものが生まれてきました。私は『当事者主権』という本を書きました。共著者の中西正司さんという人は、障害者自立生活運動のカリスマ的リーダーです。彼と出会って、私は目から鱗が落ちました。女性運動と障害者運動とは、別々の所で別々のことを行ってきたけれども、実は同じことを目指していたことが分かったからです。それは何かというと、社会的少数者の自己定義権の要求です。なぜかというと社会的少数者、例えば高齢者、障害者、女性、患者、不登校児のような人たちは、マジョリティの側からおまえは何者かということ定義されてきたからです。それに対して、私は何者であるかは私が一番よく知っている、あなたに教えてもらう筋合いはないということ突き付けたのがフェミニズムでした。障害者運動もそうでした。

### 13. 当事者とは誰か？

当事者とは、先ほど申しましたとおり、問題から立ち去ることができない人々です。今日の聴衆の中には第三者的な立場、あるいは同伴者、支援者、アライと言われる立場の人たちもいると思いますが、当事者と支援者の決定的な違いはイヤなら逃げられるかどうか、たとえ自責の念を覚えたとしてもその現場を離れることができるかどうか、ということだと思います。

「当事者主権」という言葉は非常に強い言葉ですが、主権というのは自分の運命を自分で決めることができる、他の誰にも委ねることのできない至高の権利という意味を持っています。「当事者主権」という言葉をわざわざ使わなければならなかった理由は、私は何者であるかをマジョリティに決められてきたマイノリティの自己定義権の要求であったためです。これを「私のことは私が決める」と言ってしまうと、いささか齟齬 (そご) が起きます。「当事者主権」をどのように英語に訳すか。これは日本で生まれた言葉ですから外国語に翻訳しようがありません。いろいろなことを言う人がいました。英語の得意な方が「それは self-determinism といいます」と言われたから「待ってください。それでは自己決定・自己責任のネオリベリズムと同じになってしまいます」と言ったら「self-autonomy」という言い方もあると。autonomy と independence とは意味が違いますからそれでも良いのですが、「私のことは私が決める」というだけではなく、誰かの助けをえながら「私のことは私が一番よく知っているから、何をしてほしいかは私に聞いてよ」というのが一番正確な言い方なのだろうと思います。「私が私の専門家」という言い方もあります。「Nothing About Us Without Us」とは障害者自立生活運動の国際的な標語ですが、「私たち抜きに私たちについて何事も決めないで」という意味です。つまり「私がどうしてほしいかは私に聞いて」というのを英語にするとこうなるでしょう。

### 14. 当事者研究とは何か？

まず私から出発するのが学問ですけれども、当事者研究の中では、私のことは実は私にもよく分からないのではないかという疑問も生まれてきました。私とは誰かを同じような仲間たちと共に分かち合い言語化していくというプロセスの中で、当事者研究が次々に生まれました。

そこで障害学というものが生まれました。障害学会も発足しました。初代会長の石川准さんは東京大学社会学研究室が生んだ初の視覚障害者の社会学博士です。患者学も生まれました。不登校の子どもたちは「どうして学校に行きたくないの」と聞かれてもほとんど答えられません。自分でもよく理由が分からず、言語化できないボキャ貧の状態

です。かつてそういう不登校の経験をした子どもたちが長じて後言語を獲得してから、あれは一体何だったのだろうということの研究した不登校学というものも登場してきました。『不登校は終わらない』は、貴戸理恵さんの修士論文をもとに本にしたものです。彼女は「づら研」という研究会を主宰していますが、「生きづらさ研究会」の略称です。当事者研究で一番有名なのが、「べてるの家」の当事者研究です。当事者研究という言葉が一挙に広がったのは彼らのおかげです。恐らく皆さま方はよくご存じだと思いますので説明は省きます。言語化する能力のない人もいますが、言語能力のある人でも取り合ってもらえない人たちが精神障害の方たちです。その人たちの言うことにきちんと耳を傾け、そこから学ぼうという専門家たちが生まれました。ですから、「べてるの家」の統合失調症の患者さんたちが精神科医学会にゲストとして呼ばれるようなことも起きてきました。

それに刺激を受け、さまざまな障害という名を付けられたマイノリティの人たちが #MeToo と当事者研究を始めました。それが今の当事者研究の新しい動向です。発達障害当事者研究というものも生まれました。綾屋紗月さんという人がアスペルガー症候群だと言われた自分自身の研究をしています。また、熊谷晋一郎さんという人は脳性まひですが、綾屋さんと共同研究をしています。発達障害と身体障害では、共通点がないように見えますが、さまざまな障害を横断的に比較し研究することにより、共通点と差異を見いだすこともできるようになりました。ですから、今このように当事者研究は大はやりです。当事者研究のキーワードはいずれも生きづらさです。生きづらさはなぜ起きるかという、社会的少数者だから生きづらさを抱えざるを得ないわけです。この当事者研究が、女性学のように学問として市民権を得るかどうかは、まだ分かりません。

## 15. マジヨリティ研究

社会的少数者を少数者にするのは多数者です。マイノリティは好き好んでマイノリティになるわけではありません。Who minoritizes us? と問いかけたいと思います。そうするとマジヨリティ研究も生まれます。人類学の中では、人種を作り出したのは誰かという白人たちですから白人とは一体何者かと Whiteness Studies が一時期大はやりになりました。

女性と自分を差別化することで同一性を確立するのが男性ですから男性性研究 Masculinity Studies も盛んです。ついに Social Majority 研究も生まれました。このような研究から分かるのは、マジヨリティであるとは何かということ。「自分が何者であるかを問われずに済む状態である」ということです。それを問い返すまなざしが当事者研究の中からも生まれました。

## 16. 当事者研究の経験知

熊谷晋一郎さんは脳性まひの当事者で、車椅子生活者です。東京大学医学部初の車椅子学生として、東大医学部は彼を受け入れるためにてんやわんやの騒ぎをしました。彼が雑誌の当事者研究の特集で私に原稿を依頼してきました。「当事者研究と女性学」というタイトルで書いてくださいと言われたので、「待ってください。タイトルを変えさせてください」とお願いして、「当事者研究としての女性学」に変えてもらいました。

熊谷さんが生んだすばらしい当事者の経験知があります。「自立とは依存先の分散である」。脳性まひの彼は子どものときからお母さんに依存せずには生きてこられませんでした。お母さんなしで僕は生きていけないと思い、母は母で私なしでこの子は生きていけないと思い、追い詰められると「いっそひと思いにこの子を道連れに」となりかねません。その中で彼は「自立とは依存のない状態を指すのではなく、たった1本の黒柱に深く依存していると思わずに済む状態のことである」と言っています。ですから、黒柱の代わりに細い筋交いがたくさんあれば数本抜けても大丈夫ということです。見事な経験知でした。私はうなりました。ここで彼は自立の概念を再定義しました。さらにそれを応用して依存の需要と供給の独占という概念まで議論を発展させました。依存の需要の独占とは「お母さんはボクだけのためにいる」こと、供給の独占とは「わたしがいなければオマエは生きていけない」こと。そのいずれも悪であると言ったのです。このような経験知が現場から生まれてきています。

## 17. 当事者研究の罨

しかし、当事者研究にもミイラ取りがミイラになる罨があります。参考になる先例が、人類学がたどった道です。



人類学とは帝国主義の先兵と言われた学問ですが、その中で良心的な人類学者たちは現地の人たちの悲惨な状態、あるいは白人たちによる差別と抑圧を目の当たりにし、それに義憤を感じると自分の特権的な地位を捨てて現場に入り込みます。これを現地化する Going Native といいます。反対に現地の優れた少年・少女たち、主として少年たちを宗主国の高等教育機関に送り込み、そこで教育して植民地エリートを育てます。そういう植民地エリートたちが帝国主義支配の代理人になっていきました。そういうエリートの人類学者を Colonial Anthropologist といいますが、どちらかになりがちでした。前者であれば学問は解体しますし、後者であれば学問のコトバ（西洋知）によるローカルな知の搾取と領有が起きます。けれども、この Colonial Anthropologist の中からバイリンガルであることを手放さず、敵の武器を取って敵の弱点をつく対抗エリートが生まれました。

「敵の武器を取って戦う」と表現した人は、postcolonial studies の中で subaltern studies を打ち立てた Gayatri Spivak という人です。宗主国の言語を学び、それを使って宗主国の弱点をついたのが Said や Spivak です。こういう人たちは学問のコトバと当事者のコトバの bilingual になり、そのはざまを生きるという選択をした人たちです。私自身も自分が行ってきた女性学とは一体何だったかという、学問の世界で男の言葉を習得し、男に分かるように男の欠陥や弱点や問題点を指摘したことになります。私は自分を男言葉と女言葉のバイリンガルであったと思っています。

## 18. 学問の役割

学問の役割は何でしょうか？学問が未来を予測することはほとんどありません。学問の予測はほとんど常に外れてきました。例えば科学的歴史観と言われたものに唯物史観や発展段階史観がありますが、もし 19 世紀に生まれたあの科学的歴史観が正しかったとしたら、今日の世界は共産主義になっているはずですが、見事に外れました。マルクスの言う窮乏化仮説も間違っていることが分かりました。窮乏化仮説とは、人間は抑圧し、抑圧し、抑圧し抜くと追いつめられて必ず立ち上がるというのですが、その反対に、抑圧し、抑圧し、抑圧し抜くと人はその抑圧に慣れるという恐ろしいことがホロコーストの中で事実として浮かび上がってきました。したがって学問の未来予測はそれほどあてになるものではありません。それどころか学問は過去の知に依存していますから AI と同じで想定外の事態に対応できません。これまで積み重なってきた経験知の延長上に未来を予測していますので、ますます予測不可能性にかけている世界に対しては役に立たないと言えます。学問の変化以上に現実の変化のほうがずっと早いからです。自分が研究者をしていて研究者は一体何をしているのだろうかと考え、現実の変化を愚直に誠実に追いかけるのが学問の役目ではないかと思うようになりました。

## 19. 語られなかった体験

最近出てきた新しい変化は、見える化されなかったもの、語られなかった体験がようやく語られるようになってきたということです。体験は、ただそれを実際に味わったというだけでは十分ではありません。言語化されることを通じて初めてリアリティを獲得し、体験は経験になります。語られなかった体験とは、もやもやとしたさまざまなノイズが残ったとしてもなかったことになります。あのもやもやは一体何だったのか、あれはセクハラというものだったのだ、DV というものだったのだ、という経験の再定義を通じて初めて、体験は経験になっていきます。とりわけトラウマ的な体験やスティグマ的な体験には言語化が追い付きませんでした。誰も聞こうとしなかったためになかったことになった体験に耳を傾ける人々が登場してきました。そのための条件は、語られる場が安全な場であり、語る相手が安心な相手であるということです。

最近重要になってきたのは語りや証言の重要性です。とりわけマジョリティの語り、これを master narrative といいますが、それに対する対抗的な語り counter narrative や代替的な語り alternative narrative が次々と登場してきました。そのトラウマ的な語りに、性暴力被害者の語りがあり、その 1 つに元慰安婦の語りがあります。そのトラウマ的な語りをノーベル賞も評価したのが、スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチの受賞でした。私たち日本人はアレクシエーヴィッチに先立ち、石牟礼道子という非常に優れた語りの書き手を持っています。

最近病の語りも出てきました。DIPEX Jpana のようなサイトがあります。たくさんの情報が蓄積されてきています。これは当事者の知です。医学という専門知に対して当事者自身が自分の病の経験を語り出しました。そこから専門家が学ぶことはたくさんあるはずです。わけても、語る能力があっても相手にされない、それが精神病患者さんだけ

でなく認知症の高齢者たち、あるいは若年認知症の方たちです。その中でもようやく認知症当事者の語りが登場してきて、それに専門家が耳を傾ける時代が来ました。現場は非常に多様な場所に開かれています。

## 20. Local (地域, 場所) とは何か？

それではローカルとは一体何でしょうか。日本語では地域や場所と訳されますが、それは異質なものが出合う interface/interaction の場所です。そこには必ずざわめきがかかります。摩擦も生まれます。決して心地よい場所ではありません。そのざわめきから初めて情報が生まれます。ノイズなき所に情報は発生しないというのは情報工学の基本のきです。システム論の大家、Nichlas Luhmann は面白いことを言っています。「システムとは情報の縮減装置である」と言うのです。システムとはルーティンを達成するためにできるだけノイズの発生を抑制するための良くできた装置だということです。逆に言うと、それによりノイズの発生を抑制することになりますから情報も生まれにくいということになります。

## 21. 大学地域連携とは何か？

最後に大学地域連携とは何でしょうか。今の文科省の教育行政は大学の二極化を目指しています。1つはグローバルマーケットで生き延びろという研究開発大学院大学です。もう1つは国内マーケットで地域に対して貢献しろという地域連携大学です。恐らく地域連携はここから来たのではないかと思います。この2つの軸で運営交付金を傾斜配分します。ですから、どちらにしても役に立つ学問研究をしる、グローバルマーケットでもドメスティックなローカルマーケットでも、要するに経済効果を生めということです。このような考え方は直ちに教養教育廃止論や文学部廃止論につながりそうですが、とはいえ最近新しい専攻が次々ととりわけ地方大学で生まれてきています。私はそれは決して悪いことだと思いません。歓迎すべきことだと思っています。

コミュニティ・デザインやコミュニティ・オーガナイズングという訳の分からない横文字でいろいろ呼ばれていますが、やっていることは何かというと以下の2つのことです。第1は現場にある新しいニーズを掘り起こすこと、第2は既にあるものの価値を再発見することです。研究者はそのとき傍観者、第三者ですが、役に立つこともあります。なぜかということ、マレピトとジモティが出合うことによる化学反応を引き起こすという例があるからです。そういうことを行ってきた人に山崎亮さんのようなキーパーソンもいます。

## 22. 最後の問い：プロデューサーは育てられるか？

私の話はこの辺りで終わろうと思いますが、皆さま方に問いを投げ掛けたいと思います。プロデューサーとは自分に何か特殊なスキルがある人ではありません。さまざまな在来の資源を組み合わせることから化学反応を起こし、新しい価値を創造することのできる人材をいいます。日本では一番このような人材が足りません。専門家は多いし、スキルを持った人たちも多いです。けれども、それを束ねて新しいまだ見たことのない価値を創造するプロデューサーを育てることについて日本人はこれまでも得意ではなく、現在でも十分とは言えません。

私が山崎亮さんに会ったときに質問したのは以下のことでした。彼は大学で教えていますが「あなたがやっていることは分かりますが、それをどのようにして学生に教えることができるのか。どのようにして人材を育てることができるのか。どのようなカリキュラムの下に誰が誰に教えるのか。一体どのような人材をどのような方法で選抜すればよいのか」。彼から返ってきた答えは、「自分の実践現場に学生を連れていき、背を見て学ぶこと」というまことに職人的な芸人の養成のような方法でした。プロデューサーの養成のためのカリキュラムやノウハウがもし地域連携学会の中から生まれるとしたら非常に価値のあることでしょう。

幾らかお時間を残して皆さま方からご意見・ご質問をお聞きしてよいと聞いていますので、私の話はここで終わります。ありがとうございました。

## 質疑応答

Q1. 今日の上野千鶴子先生にフェミニズムから当事者研究、コミュニティ・デザインの話に至るまでジェンダーを基

軸に幅広い視点からお話をいただき本当にありがとうございました。今日上野先生をご招待くださったのも大熊先生のお声掛けと伺いました。大熊先生にも感謝申し上げます。

地域と女性ということで1つ質問をします。実は個人的なことで恐縮ですが、私は紀伊半島の南端の小さな町の出身ですが、帰ると女性が地域で活躍しています。もちろん家庭でも職場でも活躍しているのですが、何か意思決定をするときに地域の中で長老の男性の意見を聞くことが慣習になっており、なかなか女性が意見を出せません。多様な地域の人がいる中で対等に意見を出し合える場を作りたいと思うのですが、女性を中心にとすると女性の会になってしまいます。ですから、多様な場で話をできるような雰囲気づくりをしていくために学会として、大学の者として地域に行ったときに何が可能なのか、そういうヒントを少し頂ければありがたいと思います。

上野：地方にはそのような所がたくさんあると思います。地方を変える・地域を変えるということが大学や研究者にできるとは私には思えませんけれども、まず大事なことは例えば男性だけで物事を決めることが不当で不都合なことであるというクレームメイキングをおこすことです。そのクレームがその地域の中から起きてこなければ地域は変わりません。問題とは誰かがクレームを申し立てることにより初めて問題化します。かつそれを支持する人々がいることにより問題化します。実際の例ですが、鹿児島県は女性議員ゼロ議会がたくさんある地域です。その議会に「女性がいないことで何か不都合がありますか」と質問したジャーナリストに対して、男性の議長は「何の不都合もありません」と答えました。当たり前のことです。従来どおりのことを行っていればそういう答えしか返ってきません。そうであるとしてもそれは不当なことです。先ほど紹介したヤングケアラー、不払い労働、ワンオペ育児という概念は不当なことだという価値観を含む概念であったわけですから、例えば「女性ゼロ議会」という言い方も不当感を示す言い方の一種です。ジェンダーという概念がそもそも不当だという価値観を含む概念です。ですから、そういう価値観そのものを現場の方たちが共有していかない限り、そこでは問題が見える化しないと思います。それは大変息の長いプロセスなのですが、方法として使えるのは比較です。よそでどうしているか。よそでできていることがなぜうちでできないのか。複数のシステムに股を掛けることによって、不当なことが見える化します。例えば外国へ行った人が大変大きな衝撃を受けて日本の現状に疑問を持つというのと同じように、例えばよその事例を示す、あるいはその人たちをよその現場に引っ張り出して、よその場で異なるシステムを経験してもらうということ、そこでノイズを起こすということが1つの方法かと思います。